神明校舎で出会った印象深い先生方の思い出

遠　藤　　光
実践女子大学短期大学部 名誉教授
（2014 年 3 月 31 日 英語コミュニケーション学科 退職）

I

実践女子大学短期大学部が設立 70 周年を迎えたことは、全くご同慶の至りです。70 年の間にはさまざまな変遷と転変があったことは、『実践女子学園 100 年史』（2001.5）と先日送られてきた『創立 120 周年記念実践女子学園史（1999－2018）』（2020.3）に詳述されていることと、2020 年 10 月 1 日発行の『なよたけ・情報版』No.26 に、髙瀬真理子先生による簡潔にしてすこぶる要領を得た見事な御高論「短期大学部 70 周年に寄せて」が載っているので、もはや私など出る幕はないのですが、短期大学部部長の武内一良先生から「在任期間での出来事やエピソードなどについて何か執筆せよ」とご慫慂（しょうよう）がありましたので、表題に掲げた内容について、全く個人的なことを思い付くままに書かせていただきます。

私の在任期間は 1985（昭和 60）年 4 月から 2014（平成 26）年 3 月までの 29 年間でした。短期大学は渋谷と埼玉県の松伏に始まり、日野市神明で統合し、そこで何度かの改変を果たしたあと、文系のみが再び現在のように渋谷に戻ってきました。神明校舎に初めて出勤した当初は、「本当に田舎にきてしまったなあ」と、学生たちのことを考えて意気消沈したものでした。

短大生は、就学期間が 2 年間という短い期間の中で専門的知識と教養と、都会人としてのセンスを身につけ、服装や言葉遣い、礼儀作法、複雑な社会の仕組みなどの育成を行なわなければならず、そのためには、やはり渋谷でなくては……、と赴任した当初から私は思っていました。

とはいっても、私個人は、畑などどこにも見当たらない渋谷の実践女子学園中学校・高等学校に 13 年間勤めていたので、神明校舎の周りには、鉄筋コンクリートのビルというと、日野市役所と銀行だけで、あとは戸建ての民家がぱらぱらとみられるだけでした。その間は広い畑ばかりだったのです。これがよかったのです。学生さんたちには申し訳なかったのですが、私個人は、この畑ばかりの郊外田園風景が気に入っていたのです。

ところがこの風景も、29 年間勤めている間に、いつの間にか畑が潰されて、戸建てや、アパートや、4～5 階建てのビルがどんどん増えました。私が密かに楽しんできた道端の様々な雑草とその花々、小鳥たちの鳴き声、風にそよぐ木々の葉が瞬く間に消えていったのです。だから大学・短大の文系の学科が渋谷に戻ると聞いた時には、ほっとしたわけです。しかし、日野での最後の年度はすなわち私の定年退職の年度でもありました。

II

現在退職して7年になろうとしています。しかし理由は分からないが、退職したことが40年も50年も前の事のような気がしています。短大で一番印象に残っていますのは、きれいな校舎と、親しくしていただいた幾人かの先生方との交流の思い出です。それから正門前のあの贅沢な桜並木です。凄かったですねえー。それと私の研究室が第3館3階B棟にあってグラウンドに面していて、壁一面がガラス窓になっていました。その窓のすぐそばに巨大な一本の桜の樹があって、これも毎年春になると実に見事な花をさかせていたのです。だから新学期の頃はいつも心が弾んだものでした。桜の花に囲まれると私の心は、たちまち優雅な古代人になっていたのです。

短大の英文科に赴任して2年目の11月に、郊外研修というのがあって、英文科は高尾山登山でした。私にとっては初めての高尾山で、1・2年生全員と先生方が京王線終着駅の高尾山口に集合し、リフトや登山鉄道は使わずに列をなしてぞろぞろと登って行くのです。先生方も学生の間に交じってフーフー言いながら登って行ったのです。私はしんがりを仰せつかって、後から遅れてくる学生を1時間ほど待って（といっても誰も来なかったが）一人で登ったのです。頂上に着くと、学生たちはすでに自分たちで用意した昼食やお菓子を開いて、ワイワイと楽しそうに食事とお喋りと景色を満喫し、先生方も学生に交じって写真を撮ったり、薬王院まで足を延ばして（私もいっしょに）参拝しました。やがて午後2時ころに頂上の広場に再び集合し、そこで解散宣言がなされ、登って来た道を歩いて下るのですが、道が細いので待ちきれず、登山鉄道やケーブルカーに乗って降りて行くものもいました。

学生が全員降りたのを確かめてから先生方も降りて行くのですが、事務員の升田さんと私は小木曽雅文先生に誘われて、3人でもう少し山歩きをすることになったのです。小仏峠を越えて神奈川県側に入り、相模湖を目指して下った。神奈川県側に入ってすぐの急勾配の坂を降りて行くとき、とても怖かったのを除けば、それは美しい秋の紅葉を充分に堪能できたのです。これを機に、小木曽先生と親しくなり、ときどき立川駅前で一杯やりながらお互いの研究分野について話しあったり、英米文学全般についての様々な有益なお話を拝聴させてもらいました。またシェイクスピア劇公演に三度ほど御一緒しました。

小木曽先生のご専門は、アイルランド生まれの英国のノーベル文学賞受賞者で劇作家ジョージ・バーナード・ショーを主として研究されておられ、日本バーナード・ショー協会の重鎮会員として、会長や機関誌『バーナード・ショー研究』の編集委員ほか、数々の研究発表や、「日本バーナード・ショー協会の40年」と題した重要な講演を行いました（2011.11.20）。先生はその後、何回か病魔に襲われたようですが、89歳になられた現在も矍鑠（かくしゃく）として研究を続けておられます。四大のロプレスティ先生と小木曽先生と私の三人でよく高田馬場の駅前の喫茶店で何時間も歓談したのがとても懐かしいです。ロプレスティ先生が話しの興にのってテニスンの詩に節をつけて小声で歌ってくれたこともありました。

Sweet and low, sweet and low,	心地よい柔らかな、甘くて静かな、
Wind of the western sea,	西の海から来る風よ、
Low, low, breathe and blow	柔らかく甘く、そよいで吹け
Wind of the western sea!	西の海を渡って来る風よ！

III

赴任して数年間研究室が同室であったのと、大学院が同じであったことで、直ぐに親しくなったのが梁瀬浩三先生でした。しかし先生は 2003（平成 15）年 3 月で定年退職され、2019（令和元）年 1 月 12 日に永眠されました。享年 85 でした。退職された後に年に一二度電話でお誘いをしても、会うことは一度もなかったのです。病名はしりませんでしたが大量の薬を飲まれているということで通院以外、外出はほとんどされていなかったようです。体の調子はよほどよくなかったのでしょう。

梁瀬先生は非常に真面目な方で、研究心も旺盛でした。大学院時代は山屋三郎先生の高弟でいらして、その秀才ぶりは、十歳以上後輩であった我々院生の間でも評判でした。立身出世や権力を目指す人間が大嫌いで、短大の英文科会では某主任に真っ向から反対意見を述べられていました。

後に梁瀬先生から伺った話では、梁瀬先生が大変尊敬していた山屋三郎先生が脳内出血で亡くなられた時には、相当なショックを受けられたが、その悲しみを全て勉強に注いで恩返しをしたいと自分に誓ったのだそうです。山屋三郎先生が倒れられて東大病院に運び込まれたのは私がちょうど院生であった時で、当時文学部部長であった岡本成蹊先生に頼まれて私が見舞いに伺いましたが、面会謝絶でした。代わりに山屋三郎先生の奥様が病室から出てこられて、「もう山屋はダメでしょう」と力なくおっしゃって、「みなさんにそのようお伝えください」ということだったのです。亡くなられたのはそれから間もなくでした。

梁瀬先生はその後もコツコツと勉強なさって、論文をまとめられ、『時間と美、機会と生命――現代社会の病理を照らすポーとホーソーンの文学――』（幻燈社書店、1994. 10）を上梓されました。時代を先取りするような鋭い内容の本でした。山屋先生の思想が乗り移ったかのような論旨の筆致でした。出版記念会には奥様も出席してくださいました。ポーとホーソーン研究者の大御所がほとんど出席して下さって、梁瀬先生は非常に喜ばれ、「天に上ったような気分です」と仰っていました。私は司会を務めさせてもらっただけでしたが、小木曽雅文先生が故山屋三郎先生と梁瀬先生の熱い師弟関係を語って下さって、梁瀬先生は感涙を催されておられたのが印象的でした。

IV

もうおひとり英語コミュニケーション学科で仲良しになった先生は、現短期大学部部長の武内

一良先生です。ごく親しくなるきっかけはポピュラー・ソングでした。私は中学生の時からヴァイオリン（今は弾いていません）とウクレレを弾くのが大好きで、中1の春（昭和31年）にオリジナル型のウクレレと一緒に教則本（大橋節夫著『ウクレレ入門』）も買って、独習で覚えたのです。高1の時には出版されたばかりの山本芳樹（編）の『ウクレレ名歌百曲集 *The One Hundred Famous Songs for Ukulele*＝奏法解説付』東京：新興楽譜出版社、1959年発行を買って、夢中になって一曲ずつ征服していったのです。この百曲集には日本語のほかに、全部原語の歌詞が振ってあったので、ほとんど英語、ドイツ語でもいっしょに覚えました。しかし現在はほぼ忘れてしまいましたが。

短大生に≪英詩≫を教えていると、“Twinkle, Twinkle, Little Star”や、“London Bridge Is Falling Down”や、“Auld Lang Syne”などが出て来るので、私がウクレレを弾いて伴奏し、学生たちと合唱しました。学校の研究室に常時テナー・ウクレレ〔ふつうサイズよりやや大き目なもので音程もやや低いが、響きは大きい〕を置いていたので、授業が終わったあとにひとしきり弾いてから帰ったものでした。すると武内先生がギターを抱えて来られ、「先生、一緒に合わせて歌いましょう」と私の部屋に乗り込んできたのです。

いやはやそれからはもう、若い頃に流行った歌を次々と歌って弾いて、一気に共通感覚にはまったという訳でした。武内先生のおおらかな性格と人柄は他の先生方にはあまりみられないもので、私は武内先生によって多くを学び、それまで病によって沈みがちだった心も大いに救われたのです。ただ一つだけ後悔していることがあります。それは2004年3月に武内先生は立教大学から観光学博士の学位を授与され、2006年3月にその博士論文を出版されたのですが、その時に出版記念会をやってあげられなかったことです。その頃私に切羽詰まった仕事があったのか、体調がよくなかったかして、機を逃してしまったのです。私としては一生の不覚を取ってしまいました。

それにしても日野の駅前の喫茶店で、武内先生は紅茶を、私はコーヒーを嗜（たしな）みながら、英国・米国だけでなくヨーロッパの国々の歴史や言語や、観光スポットが人々を引き付ける原動力は何かなど、様々なことを拝聴して、実に愉快な時を過ごしましたが、私にはまったくもったいないくらいの時間だったのです。その後、退職してからですが、或ることがきっかけで、四大英文学科の稲垣伸一先生とも数年前から親しくなり、年に一度くらいのペースで、3人で飲み会をやるようになりました。3人が3様のスリリングな教養ある〔?〕会話を楽しむ機会になり、文学や宗教や人間性や人種問題など、話題が限りなく広く深くなってゆくので、生きる喜びの一つになっています。

V

他学科の先生の思い出としては、食物栄養学科の奥野和子先生と年に数回ですが、日野市役所の食堂でたまたまお会いし、お話しさせていただいたことが懐かしい思い出になっています。先生は凛としていらして、一見きびしそうにお見受けしましたが、お会いする度ににっこり笑って

下さって、教養も豊かで理知的な方でした。アメリカへ留学されたとも聞いています。

私がたまたま教室で使用していたテキストの原著者であるスタンフォード大学教授のジョアン・マコーネル先生が来日していると聞いたので、全日空ホテルに滞在中の先生にアポを取って会いに行ったのです。そしてうちの短大で講演して頂けないかと恐る恐る頼んだのです。そしたら、マコーネル先生は大変喜んで下さって、平成 8 年 11 月と、平成 13 年 10 月の二回にわたって日野に来て下さったのです。1 回目は英文学科主催で短大で、2 回目は英語コミュニケーション学科主催・国際交流センター共催で、四大の香雪記念館で行なわれました。嬉しかったのは、奥野先生も講演を聴きに来て下さったのです。その上、講演後の懇親会にも出席して下さって、学生たちと一緒にマコーネル先生と楽しそうにお話しされていたのです。

ついでながら、この講演でもう一つ嬉しかったのは、司会は私が下手な英語でマコーネル先生の紹介をやらせてもらったのですが、オープニング・パフォーマンスとして、幡垣佑子先生と小木曽雅文先生のお二方が、素晴らしい英語でマコーネル先生の業績や活動を紹介して下さったことです。今もって感謝している次第です。

それから 2007 年だったと思いますが、奥野先生はキャンパス内で私の姿を見つけられて、私が書いた「シドニー・キーズの詩四篇」を読ませて貰って感銘を受けた、と仰って下さいました。私はちょっと驚いて、食物栄養の先生が、英コミの学科誌 *Jissen English Communication*, 37 号を読んで下さっていたことに感激したのでした。奥野先生、本当にありがとうございました。

VI

他学科の先生ではもうお二方、強く印象に残っている先生がおられます。日本語コミュニケーション学科の加藤裕一先生と髙瀬真理子先生です。お二方とも正義心と信念の塊であって、厳しさと優しさ、それにユーモアもあり、絶えず前向きで、授業も、ご自身の研究も、両方とも大変熱心で、学内の仕事も見事にこなされる、そういうお二人を私はひそかに尊敬していたのです。

加藤先生との出会いは、私が短大に移動になる 4 年前、すなわち実践の中高に勤めていた時代の 1981 年 9 月 8 日に、英国ケンブリッジ大学に留学中の私ども家族の住居に、突然加藤先生から電話があって、実践女子短大に勤めている者で、いまケンブリッジに滞在中なのですが、実践の理事長の多田基先生から、中高の遠藤さんに会うようにと言われまして電話をしました、とのことだったのです。その日の夕刻さっそくヒルズ・ロードにある私たちの滞在先（Highsett 48）に来ていただきました。短大には梁瀬先生がおられること、四大には伊藤廣里先生と澤井勇先生がおられることなど、それから私の大学院時代の指導教授は桂田利吉先生であったことなど、いろいろ話を沢山しました。

帰国して 4 年後に私が短大に移動になった時に、ハイセット 48 に来ていただいたことの御礼の挨拶に伺って以後、なかなかじっくりお話をする機会に恵まれなかったのですが、少しずつ友情を温めていくことになりました。ある日、加藤先生がひょっこり訪ねて下さって、「こうい

う本を出しましたので先生に謹呈します」と言われて、『上田秋成の思想と文学』（笠間書院、2009.10）を置いて行かれました。有り難く頂戴したわけですが、いくらお忙しくても、こうやって着々と研究の方も進められていたのだと、先生の学者魂に触れたような気がしました。先生は退職後も国内だけでなく海外にも毎年のように出かけられ、いくつかの趣味にも没頭されておられるようです。

VII

もうお一人、正真正銘の実践っ子である髙瀬真理子先生とは、ちょくちょくお話しする機会が多く、日コミの学生の授業中に失言をしたら、さっそく叱りに来て、私はコテンパンにやられ、学生にも謝ったことがありました。しかし、そのあとは後腐れなく、からっとして、いつものようにいろいろ興味ある話をして下さるのです。ご専門の国文学のほかに、様々な方面に才能を発揮され、ぐんぐんと前進される知識欲旺盛な方です。御業績の一部である『室生犀星研究――小説的世界の生成と展開』（翰林書房、2006.3）をご出版されたとき、私にも何気ないお顔で渡して下さったのです。何と、400ページもの大冊でした。私にもこんな本が出せたらなあ、と思ったのですが、その後、次々と病魔に襲われ、授業をなんとか休まず続けるのが精いっぱいでした。

どういう訳か知らなかったのですが、髙瀬先生が選ばれた研修先はロンドンでした。どうやら20世紀初頭のころにロンドンで活躍していた、牧野義雄画工について調べておられたのではないかと記憶しているのですが、もし違っていたら謝ります。髙瀬先生の研修先は、恒松郁夫氏が創設した「ロンドン漱石記念館」。当然、恒松氏にいろいろご教授を賜り、様々な人々を紹介してもらい、「なんとか・クラブ」への出入りも許され、漱石と牧野についてはかなりの資料的収穫があったかと思われます。

いつであったか失念してしまったが、恒松氏が里帰りをされた時、髙瀬先生の依頼によって、実践女子大で講演をしていただくことが決まり、髙瀬先生は私にも聴きに来ませんかと、声を掛けて下さった。当時私は、牧野義雄について、あれこれ調べていることを髙瀬先生に話していたからかもしれません。講演が終わった後、控室で、髙瀬先生が私を恒松氏に紹介して下さり、おかげで恒松氏とひとしきり歓談ができて楽しい思い出になっています。恒松氏には実に面白い著書『こちらロンドン漱石記念館』（中公文庫、1998）がありますが、みなさんぜひお読みになって下さい。とにかく底抜けに面白い本ですから。前述した『なよたけ』に寄せた髙瀬先生の文章の最後に、恒松氏と遠隔でつながった「漱石と英国絵画」という題で授業を計画中であることに触れています。

私が牧野義雄に興味をもったきっかけは、今は亡き上智大学名誉教授のピーター・ミルウォード先生が、1991年に恒松氏のロンドン漱石記念館で、Yoshio Markino, *A Japanese Artist in London*（1910）という牧野の自伝を見つけ、一読して大変興味をもたれ、これを現代英語に直して、*London in the Mist: Adventures of A Japanese Artist* と改題し、それに中野記偉先生と信岡巽先生の注釈付で、英語のテキストとして某出版社から出版されたものを手にした時でした。私

の手元にあるのは上智大学名誉教授の中野紀偉先生からの寄贈本で、添え状には「牧野の生涯を NHK が来年のテレビに出すべく目下取材中と恒松氏より知らせがありました。では取急ぎ一筆迄。1992 年 12 月。K. N.」と認(したた)められています。残念ながらこのテキストは、出版社の廃業によって現在は絶版となっています。何とかして復刻版が出るとよいのですが。

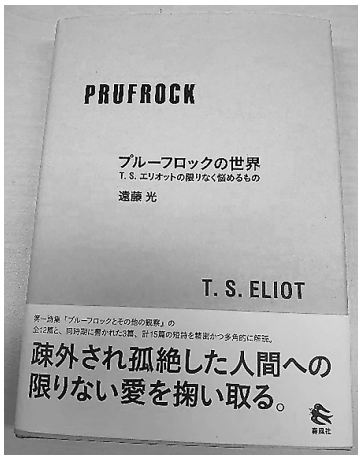
最後になりますが、2016（平成 28）年 11 月末に、髙瀬先生からお誘いがあり、ドナルド・キーン・センター柏崎の理事であられる吉田真理氏の講演会（実践女子大 403）を設定したので来て見ませんか、12 月 1 日です。演題は「ドナルド・キーン先生の軌跡に触れながら」です。ということで喜んで出席させていただきました。講演のあと控室で吉田氏からさらにいろいろな話を髙瀬先生と伺うことができて幸せでした。キーン先生は私が敬愛する宗方邦義先生のご友人で、宗方先生が主宰する国際融合文化学会の名誉会員になられたばかりでしたのに、ついこの間鬼籍に入ってしまわれました。キーン先生とも一度でいいからお話ししてみたかったです。

髙瀬先生にはいろいろお世話になりまして、ありがとうございました。

（2020. 10. 10）

遠藤先生は、この 11 月 9 日付で、『プルーフロックの世界――T. S. エリオットの限りなく悩めるもの――』（春風社）を上梓されました。名誉教授としてのご活躍、今後も期待いたしております。ご著書のご恵贈、ありがとうございました。

（髙瀬記す）



遠藤先生の近著